

# 中華民国初期の児童雑誌『小朋友』と海外作品の受容

三 宅 美 穂

On *Xiao peng you*, the children's magazine in early China Republic,  
and the acceptance of abroad works

MIYAKE Miho

The purpose of my work is to examine how foreign children's literature has been accepted in China. After the May Fourth Movement and the New Culture Movement, a lot of children's literature has introduced into China from foreign countries. Such background developed awareness of children's literature, and it led to publish magazines for children. *Er tong wen xue* and *Xiao peng you* are the most important among such magazines. Both of these magazines are essential in the development of Chinese children's literature. In this paper I will focus on the *Xiao peng you*. I will examine for one year from the start of the magazine to clarify the characteristic, and consider the acceptance of foreign children's literature in China at that time.

キーワード：児童文学，中華民国，『小朋友』，『児童世界』

## はじめに

『小朋友』とは上海で1922年4月に中華書局から発行された児童雑誌である。同年1月には鄭振鐸(1898-1958年)が創刊から一年間編者を務めた『児童世界』が商務印書館より発行されたばかりであり、『小朋友』はこれに対抗する形で発行された。『児童世界』は鄭振鐸の編集方針もあり、海外の児童文学作品が数多く翻訳翻案され、掲載された。同時に、号を重ねるにつれ、創作作品の掲載にも力を入れていった。中でも『児童世界』に掲載された葉聖陶(当時は葉紹鈞, 1894-1988年)の童話は後に一冊の本となり、中国初の童話集『稻草人』として1923年11月に商務印書館より出版された。

このように『児童世界』は中国の児童文学の発展に貢献した雑誌であり、与えた影響も少なくない。では、『小朋友』はどうだったのだろうか。後追いで刊行されたという経緯から『児童世界』に酷似した形態だったのか、それとも独自の形態を追求していったのか。本稿では第一期(1922年4月6日)から第五十二期(1923年3月29日)までの創刊後一年間に絞って考察し、『小朋友』創刊期の特徴を探る。同時に、掲載された海外の児童文学作品を見ることにより、当時の中国における海外作品の受容について考察していく。

## 一 『児童世界』と『小朋友』に対する評価及び『児童世界』概要

まず、『児童世界』と『小朋友』の二誌について、どのような評価がされているのかを検討し、次に先行する形で刊行された『児童世界』を紹介する。その特徴を踏まえた上で『小朋友』について具体的な特徴を見ていくこととする。

### 1 『児童世界』と『小朋友』に対する評価

『児童世界』と『小朋友』について、張之偉は次のように述べている。

「该刊的宗旨大致与商务印书馆的《儿童世界》相同。只是商务印书馆的比较偏重于外国儿童文学作品的译述，而中华书局的《小朋友》则比较偏重于创作。」<sup>1)</sup>

(本誌(『小朋友』のこと)の主旨はおおよそ商務印書館の『児童世界』と同じである。しかし、商務印書館のものは比較的外国の児童文学作品の翻訳に重きを置き、中華書局の『小朋友』は比較的創作に重きを置いている。)

これは後世において二誌の特徴を捉えた場合、その特徴を端的に表した評価の一つだと考えられる。また、新村徹は『児童世界』の西欧的、学問的体系的、多少アカデミックなところと対比して、より中国民族的、大衆的社会的、卑俗的なところが『小朋友』にはあると言えるだろうか、と述べている<sup>2)</sup>。このことから、『児童世界』が積極的に外へ目を向けていこうとした雑誌であったことに対し、『小朋友』は外よりも内へと目を向けていこうとした雑誌であった、と考えられる。

では、刊行当時はどのような評価を受けていたのだろうか。一つの目安に1935年、当時出版されていた児童雑誌について茅盾が発表した「几本児童雑誌」という文章がある。ここには児童雑誌が十二誌紹介されており、その中には『児童世界』と『小朋友』も含まれている。茅盾はこの二誌について、次のように評価している。

「假使说《小朋友》(还有《儿童杂志》)是一碗青菜豆腐汤，那么，《儿童世界》便是一碗“杂碎”，并且它这碗也比《小朋友》的大了一半光景。」<sup>3)</sup>

(仮に『小朋友』(『児童雑誌』も含む)を野菜と豆腐のスープだとするならば、『児童世界』は“ごった煮”であり、『小朋友』と比べて少しスケールが大きい。)

これは当時の二誌の編集方針を例えて述べたものであり、『児童世界』は様々な要素を取り入れた雑誌であるが、それに比べて『小朋友』は内容が平凡で面白味がないと評している。では、『小朋友』より『児童世界』が良いと考えていたのか、と言えれば決してそうではない。

「然而把一大碗“什锦菜”端在小朋友们的前面似乎就是《儿童世界》的编辑方针。这跟《儿童世界》和《小朋友》的太有“宗旨”，弄得清汤淡味地，同样是不大好的办法。」<sup>4)</sup>

1) 張之偉『中国児童文学史稿』(華東師範大学出版社, 1993年), 10頁

2) 新村徹「中国児童文学小史(4)」(『野草』第30号, 1982年), 125-134頁

3) 茅盾「几本児童雑誌」(初出『文学』四卷三期, 1935年, 孔海珠編『茅盾和児童文学』, 少年児童出版社, 1990年所収), 423頁

4) 同3, 424頁

（しかし大きな“ごった煮”を子どもたちの目の前に持つことが『児童世界』の編集方針のようである。この『児童世界』と『小朋友』は“主旨”が強すぎるため、おかげで具のない、あっさりとしたスープのような味であり、同様にあまり良い方法ではない。）

『児童世界』のようにただ単に様々なものを子どもたちに手渡すだけではよくない。かといって『小朋友』のように、面白味がないのも良くない、と矛盾は評価している。

このほかにも二誌について述べられた文章があるが、おおよそ同様の評価をしている。では、『児童世界』は具体的にどのような雑誌だったのだろうか。次に『児童世界』の刊行主旨及び具体的な内容について見ていく。

## 2 『児童世界』概要

『児童世界』に関する論考は少なく、成實朋子1998<sup>5)</sup>、武志勇1995<sup>6)</sup>、さらにはこれらを踏まえて創刊から一年間の特徴を考察しまとめた浅野法子2007がある<sup>7)</sup>。今回は浅野2007の論文を中心に、創刊後一年間の特徴をまとめていく。

『児童世界』1922年1月7日、商務印書館より週刊で刊行された雑誌である。創刊から一年間、鄭振鐸が編者を務め、その後は徐応昶（生没年不明）に引き継がれている。終刊に関しては不明な点が多く、現在は中国国家図書館で第四十七卷第二期（1941年9月）までが確認できる。張之偉の指摘によれば第一卷第一期から第一卷第六期（1922年2月11日）まで6人余りの作家の作品を除けば、八割九割は彼が創作或いは翻訳翻案した作品であるという<sup>8)</sup>。これは後に出版された『鄭振鐸和児童文学』<sup>9)</sup>に作品のほとんどが収録されていることからもうかがえる。鄭振鐸は『児童世界』創刊にあたり、1921年9月22日に「《児童世界》宣言」という文章を書いている。この中で彼は当時、以前の児童教育に対し強い問題意識を抱いており<sup>10)</sup>、同時に、多くの人が無益で有害だと思ふ荒唐無稽なものこそ児童が喜ぶものであり、この種の材料を用いることに疑いを持たない、と述べている<sup>11)</sup>。そのため、彼は掲載作品において

5) 成實朋子「『児童世界』に見られる近代中国の児童雑誌の特徴」（『学大国文』第41号、1998年）、121-135頁

6) 武志勇「論鄭振鐸主編《児童世界》的編集特色」（北京師範代学修士論文、1995年）

7) 浅野法子「鄭振鐸主編時期の中国児童雑誌『児童世界』一考察－編集方針と誌面の変遷を中心に－」（『児童文学研究を拓く 三宅興子先生退職記念論文集』翰林書房、2007年）、220-242頁

8) 同1、24頁

「从创刊号到第六期，除许地山，叶圣陶，严既澄，周建人，赵景深，顾颉刚等少量稿件外，十之八九几乎全为一人撰写和译述。」

9) 鄭尔康 盛巽昌編『鄭振鐸和児童文学』（少年児童出版社、1982年）

10) 鄭振鐸「《児童世界》宣言」（鄭尔康 盛巽昌編『鄭振鐸和児童文学』少年児童出版社、1982年所収）、3頁

「以前の児童教育は注入式教育；只要把种种的死知识、死教训装入他头脑里，就以为满足了。现在我们虽知道以前的不对，虽也想尽力去启发儿童的兴趣，然而小学校里的教育，仍旧不能十分吸引儿童的兴趣，而且这种教育，仍旧是被动的，不是自动的，刻板庄严的教科书，就是儿童唯一的读物。」

11) 同10、4頁

「近来有许多人对于儿童文学很有怀疑，以为故事、童话中多荒唐怪异之言，于儿童无益而有害。有几个人并且写信来同我说，童话中多言及皇帝、公主之事，恐与现在生活在共和国里的儿童不相宜。人类儿童期的心理正是这样，他们所喜欢的正是这种怪诞之言。这不过是儿童期的爱好所在，与将来的心理是没有什么影响的。所以我们用这种材料，

も積極的に新しいものを取り入れる姿勢を取り、結果として海外の児童文学作品が豊富となっていった、と考えられる。このことは第二卷第十三期（1922年7月1日）の「第三卷的本誌」に、世界各国の児童文学に中国の児童に合うものがあれば、私たちはできるだけ採用する<sup>12)</sup>、と述べていることからもうかがえる。ただ、海外の児童文学作品については「《児童世界》宣言」の中で翻訳をせずに語りなおす方法を用いるため、原文と多少食い違う点が出ることは免れないと述べている<sup>13)</sup>。これはより中国の子どもたちが読みやすいようにという配慮であると考えられる。実際、日本の昔話「かぐや姫」<sup>14)</sup>が連載された時、挿絵が日本風の服装から中国風の服装へと変えられるなど、いくらかの変更点が見られる（図1A及び図1B）。

鄭振鐸は海外作品のみならず、中国国内の民謡、神話等の再話にも力を入れ、創作面でも大きな成果を残している。冒頭で取り上げた葉聖陶が良い例である。投稿初期の作品と後期の作品では内容に大きな違いがあるものの、西欧の要素を取り入れつつ、独自の世界観を築いた点では他の作家とは一線を画する。その他、号を重ねるにつれ中国を題材に用いた作品も多数見られるようになる。このことは鄭振鐸が単に西欧化するのではなく、中国の独自性をも求めていたことが考えられる。

具体的に『児童世界』でどのようなジャンルがあったのかというと、鄭振鐸は「《児童世界》宣言」の中で挿図、歌譜、詩歌童謡、故事、童話、戯劇、寓言、小説、格言、滑稽画の十項目を挙げている<sup>15)</sup>。新村はこの順序は、鄭振鐸が、児童の興味にたいして、視覚的聴覚的側面、話し言葉、リズムといった点を強く主張した独自のあらわれであり、たいへん興味深いところである、と述べている<sup>16)</sup>。実際に浅野2007にある『児童世界』の目次に記載されているジャンルの掲載数を見てみると、総じて童話が多いことがわかる。次に故事、詩歌の類が多い。また、号を重ねるにつれ、ジャンルの数も増え、第



図1A ウィリントン (Teresa Peirce Williston) 「The Bamboo-Cutter's Daughter The Branch of the Jewel Tree」『Japanese Fairy Tales. Second Series』より



図1B 『児童世界』（第一卷第二期）の「月公主（一）月宮」

一点也不疑虑。」

12) 鄭振鐸「第三卷的本誌」（『児童世界』第二卷第十三期，1922年7月1日），47頁

「一切世界各國裏的兒童文學的材料，如果是適合於中國兒童的，我們卻是要盡量採用的」

13) 同10，5頁

「但我们的采用是重述，不是翻译，所以有时不免与原文稍有出入。」

14) 「竹公主」という題で第一卷第二期（1922年1月14日）から第九期（1922年3月4日）まで連載された。

15) 同10，3-4頁

16) 同2，129-130頁



三巻が最も豊富な時期であることがわかる。このことから浅野は『児童世界』の誌面には常に変化が加えられていた、と指摘している<sup>17)</sup>。また、「第三巻の本誌」で鄭振鐸は次のように述べている。

「但「知識」的涵養與「趣味」的涵養，是同樣的重要的。所以我們應他們的需要，用有趣味的敘述方法來敘述關於這種知識方面的材料。」<sup>18)</sup>

（ただ「知識」の涵養と「趣味」の涵養は同様に重要であるため、我々は彼らの受容に応え、趣味的な叙述の方法で知識方面の材料を増やしていくこととする。）

この文章からもわかる通り、鄭振鐸はそのときの需要に応じて、誌面の方向転換を行っており、結果として知育を主としたこまぎれな雑多性がだんだん誌面の多くを占めるようになる、と新村は指摘している<sup>19)</sup>。

以上のように、『児童世界』創刊期は鄭振鐸の考えにより海外の児童文学作品を積極的に取り入れただけでなく、中国の独自性も同時に追求していった。そのため、多種多様な題材が雑誌に盛り込まれたものの、その質には良し悪しがあった。ただ、このような積極的な態度は子どもたちのことを真摯に考え、子どもたちが必要とするものを提供したいという鄭振鐸の思いが色濃く現れた結果であると考えられる。では、『小朋友』はどういった主旨で刊行していったのだろうか。上述の考えをまとめると、より中国の子どもたちに密着した、通俗的な雑誌であったと考えられるが、実際にはどうだったのだろうか。『児童世界』の特徴を踏まえた上で、次に『小朋友』の特徴について考察していく。

## 二 『小朋友』概要

これより以下、『小朋友』の冊子形態、編者、並びに表紙と挿絵について見ていく。

『小朋友』は中華書局より週刊で刊行された。第一期の日付は1922年4月6日である。その後、1932年1月、第四百九十九期で停刊、同年5月26日に復刊する。1937年8月、上海で勃発した“八・一三”をきっかけに再度停刊するが、1945年に重慶にて陳伯吹（1906-1997年）が主編となり、一ヶ月に2冊のペースで復刊する。1946年2月、第七百九十九期から上海少年兒童出版社へと移り、1947年1月、第八百二十一期からは再び週刊となる。文化大革命中、三度目の停刊を余儀なくされるがその後復刊へと至り、現在も刊行され続けており、児童雑誌の中でも歴史ある雑誌である<sup>20)</sup>。

サイズは菊版よりやや小さめに統一されており、『児童世界』と同サイズ（縦18×横12.5cm）と思われる。表紙の題字に関しては第一期の目録の下部に「封面上的字是上海陸瑛寫的今年十二歲」という記

17) 同7, 223-224頁

18) 同12, 46頁

19) 同2, 130頁

20) 主に以下による。

張之偉『中国児童文学史稿』（華東師範大学出版社，1993年），35頁

丸山昇〔ほか〕編『中国現代文学事典』（東京堂出版，1985年）

錢炳寰編『中華書局大事紀要（1912-1954）』（中華書局，2002年），59頁

国家図書館，上海図書館編『1833-1949全国中文期刊聯合目錄：補充本』（中央民族大学出版社，2000年），64-65頁

述がある。このことから題字は中国の子どもが書いたものであることがわかる。以降、毎号中国の子どもたちが書いた字を題字に使用していることが目録の下部に記されている。第一期の頁構成は本文32頁、広告13頁となっている。創刊号のためか広告の頁が多く、第二期（1922年4月13日）以降、広告の頁は2、3頁に減っており、本文と広告の頁をあわせて全33頁にほぼ統一されている。以降、記念号や節目となる号では広告の頁がやや多めになる傾向がある。第十四期（1922年7月6日）に一度頁数が増え、本文と広告の頁をあわせて全45頁となる。このことは第十三期（1922年6月29日）の最後の頁に「小朋友編輯部啓事一」と題し、頁数を増やし、誌面の充実を図ることが述べられている。その後、第二十七期（1922年10月5日）境に多少頁数が増えるものの、第三十三期（1922年11月16日）には本文と広告の頁をあわせて全49頁に再び統一されている。

奥付には価格表があり、定価は一冊六分となっている。半年二十六冊分だと一元五角、一年五十二冊分だと二元八角となっており、まとめて買うと少し安くなる設定となっている。中国国内や諸外国への郵送料も記載されており、日本への郵送料は中国国内と同等である<sup>21)</sup>。以上の価格設定は『児童世界』と同じである<sup>22)</sup>。ちなみに『児童世界』は当初、中国国内への郵送料のみが記載されていたが、第一巻第三期（1922年1月21日）から諸外国への郵送料も記載されるようになる。『小朋友』と『児童世界』はサイズも全体の頁数もほぼ同等の雑誌であることから、価格面でも『児童世界』を意識していたことがわかる。

次に編者について見ていく。創刊当初、編者を務めていたのは黎錦暉（1891-1967年）、後に呉翰雲（生没年不明）が編者となる。また、本誌へ投稿している王人路（?-1956年）も編集にたずさわっていた。黎錦暉は中国の現代劇作家、音楽家で、号は均瑩、湖南省湘潭の人である。兄は現代言語学者及び文学者の黎錦熙（1889-1978年）である。長沙師範学校卒業後、音楽教員などの職を経て、1920年、中華書局で国語教科書の編集にたずさわる。後、1927年まで『小朋友』の編集を務める。その間に国語宣伝隊、中華歌舞専科学校を創立、1928年には上海で中華歌舞劇団（後明月歌舞劇社に改名）を組織し、演出に関わる。黎錦暉は中国の児童歌舞の創始者であり、彼自身『小朋友』で多くの作品を投稿している。彼は歌や脚本だけでなく、中国の民間伝説の再話にも力を注いだ。「十姊妹」（『小朋友』第一期-第十三期）や「猩猩姐姐」（『小朋友』第四十期（1923年1月4日）-第五十一期（1923年3月23日））など、長篇故事として作品を発表している。

最後に表紙と挿絵について見ていく。第一期の表紙絵はカラーで二人の子どもが座って本を読んでおり、その横には一匹の犬が座っている。以降、表紙絵はカラーで、表情豊かな子どもたちや動物たちを描いたものなど様々である。第一期の表紙にはサインがあり、第五期（1922年5月4日）を除き第十期（1922年6月8日）までは同様のサインがあることから、同じ描き手が表紙を手がけていたと思われる。しかし、人物の特定には至らない。その後、表紙にはサインがなくなり、同じ人物が描き続けているの

21) 『小朋友』第一期の奥付によると中国国内と日本へは半分、外国へは一冊だと二分、半年二十六冊分だと五角二分、一年五十二冊分だと一元零四分となっている。

22) 『児童世界』第一巻第一期の奥付によると、一冊定価六分となっている。また、一巻十三冊だと八角、二巻（半年間）二十六冊分だと一元五角、三巻三十九冊分だと二元二角、四巻（一年間）五十二冊分だと二元八角と設定されている。郵送料は中国国内及び日本へは同等の金額だが、諸外国への郵送料は別料金に設定されている。

か、それとも複数が担当しているのか判断できない。第一期から第三期（1922年4月20日）の表紙を並べてみると、第三期の表紙だけ、違うテイストで描かれているのがわかる（図2，図3，図4）。人間を描いたものと動物を描いたものではテイストが異なり，描く対象や内容によって随時変えていたようだ。表紙や挿絵の描き手は何名かいたと思われるが，いずれも丁寧に描いている。挿絵にいたってはコミカルなものも多く，絵を見ているだけでも非常に楽しめるものとなっている。挿絵の数も多く，絵をメインにしたジャンルも存在する。このことから編集側はイラスト面にも注意を払っていたと考えられる。表紙絵の内容だが，第十四期からその号に掲載された作品と関係のある絵が描かれるようになる。また，作品と関係ないと思われていた第一期から第十三期の表紙も，第十四期以降，関係した作品が掲載されている。あらかじめ表紙と作品を一致される予定だったのか，それとも一致させるために後の号で作品を掲載させたのかは不明である。以下，それぞれ対応しているものを明示しておく。

- 第一期表紙：第十四期，短篇故事「小朋友的起源（請參看第一期的封面彩色圖）」傲非，25-26頁
- 第二期表紙：不明
- 第三期表紙：第十六期（1922年7月20日），故事「眼睛開了（請參看第三期的封面畫）」傲非，31-33頁
- 第四期（1922年4月27日）表紙：第十七期（1922年7月27日），兒歌「小老鼠第一期（請參看第四期的封面畫）」傲非，15頁
- 第五期表紙：第十八期（1922年8月3日），短篇故事「小弟弟與鵝（封面看第五期封面畫）」23-24頁
- 第六期（1922年5月11日）表紙：第十九期（1922年8月10日），短篇故事「二胖小（參看小朋友第六期封面畫）」王淑周，24-25頁
- 第七期（1922年5月18日）表紙：第二十期（1922年8月17日），寓言「聰明誤了小蛙（請參看第七期小朋友的封面畫）」呂伯攸，19-20頁
- 第八期（1922年5月25日）表紙：第二十一期（1922年8月24日），短篇故事「捉住了甚麼？（請參



図2 『小朋友』第一期表紙



図3 『小朋友』第二期表紙

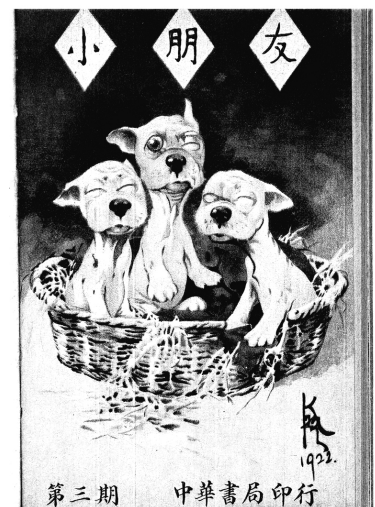


図4 『小朋友』第三期表紙



看第八期小朋友的封面畫)」呂伯攸，27-28頁

- 第九期（1922年6月1日）表紙：第二十二期（1922年8月31日），短篇故事「壓死了三條性命（請參看第九期封面畫）」14-16頁
- 第十期（1922年6月8日）表紙：第二十三期（1922年9月7日），故事詩「送給姊姊的畫（請參看小朋友第十期的封面畫）」呂伯攸，27頁
- 第十一期（1922年6月15日）表紙：第二十四期（1922年9月14日），童話「小慈善家（請參看小朋友第十一期封面畫）」呂伯攸（名前は注音字母表記），30-32頁
- 第十二期（1922年6月22日）表紙：第二十五期（1922年9月21日），短篇故事「桐兒和他的鵝（請參看第五期和第十二期的封面畫）」伯攸，29-31頁
- 第十三期表紙：第二十六期（1922年9月28日），童話「梨子皮變的鐵路（請參看小朋友第十三期的封面畫）」伯攸（名前は注音字母表記），16-18頁

ここまでいくつかの項目に注目し、『小朋友』の概要を記した。『小朋友』の冊子形態や価格設定などは『兒童世界』と酷似している部分がある。このことから『小朋友』が『兒童世界』を意識していたことは、明らかである。多少違う点といえば『兒童世界』よりも絵が多く、文字だけでなく絵を見るだけでも楽しめる誌面作りになっていた点であろう。『兒童世界』がより文学的な誌面作りをしていたというならば、『小朋友』はより幅広い年代と興味に合わせた紙面作りをしていたと考えられる。では、具体的な本誌の内容はどうだったのだろうか。

## 二 掲載作品の内容

『小朋友』第一期には「小朋友的宣言」があり、次のように書かれている。

「小弟弟，小妹妹，我願意和你們要好。我就是你們的小朋友。我的內容：有唱歌，有圖畫，有短篇故事，有長篇小說，有笑話，有謎語，有小劇本……，材料很多，並且很有趣。我，星期五出來一次，你們要看我我在中華書局等着你們。若是你們要我每星期上你們的家裏來，就請定一份小朋友門呀！小朋友們呀！我愛你們，你們也愛我嗎？」

（弟よ，妹よ，私はあなたたちと仲良くなりたいのです。私はあなたたちの友達です。私の内容は歌があつて，図画があつて，短篇故事があつて，長篇小説があつて，笑い話があつて，なぞなぞがあつて，劇の脚本があつて……，材料がたくさんあつて，大変面白みがあります。私は毎週金曜日に発売で，あなたたちがもし私を読みたいのなら，私は中華書局の中であなたたちを待っています。もし私を毎週あなたたちの家に届けて欲しいなら，一部頼んでください。子どもたちよ！子どもたちよ！私はあなたたちを愛します，あなたたちも私を愛してくれますか。）

これは『小朋友』が創刊にあたり，掲載ジャンルとして歌，図画，短篇故事，長篇小説，笑い話，なぞなぞ，脚本と最低7つを挙げ，豊富な内容をアピールし，子どもたちの興味を引く雑誌にしていこうという考えがうかがえる文章である。では実際に『小朋友』で重視されていたジャンルの傾向を見るため，以下，第一期から第五十二期まで目次から記載されているジャンルの掲載数を月毎に拾ってみた。なお，『小朋友』では子どもや作家以外の大人の投稿作品もあり，作品によっては投稿コーナーに分類



されていないものもある。それらの作品は目次の分類に従って拾っていくこととする。また、表紙の裏にある挿絵は第一期以降、懸賞は第一期から毎号欠かさず掲載されている。懸賞は第一期、第三期、第四期の三号のみ2つずつ、以降は毎号1つずつになったため、一年間で55個掲載された。また、第八期から懸賞の回答が掲載されるようになったが、第四十七期（1923年2月22日）からなぜか掲載されなくなっている。このことから、挿絵と懸賞、懸賞の回答の三項目は省略する。ジャンル名は目次通りに記載し、長篇や短篇、滑稽といった区別はつけずに拾い、括弧内に詳細なジャンル名を記載する。また、内容によっては、名前が違うものの同ジャンルとして扱った場合もある。なお、急口令と拗口令は早口言葉のことであり、同ジャンルとして扱った例である。

• 第一期～第四期（1922年4月、計四号）

歌曲……4 楽譜……1 兒歌……4 圖（文藝圖）……2 畫（滑稽畫，故事畫）……4  
 故事（故事，長篇故事）……4 笑話……2 謎語……4 劇本……4 詩（故事詩，趣詩）……4  
 小説（長篇小説）……4 其他（小時歷史）……1

• 第五期～第八期（1922年5月、計四号）

歌曲……4 歌（滑稽歌）……1 兒歌……1 畫（故事畫）……4 故事（短篇故事，長篇故事，小時故事）……7  
 笑話……4 謎語……4 劇本（劇本，獨幕短劇）……3 急口令……1  
 遊戲（科學遊戲）……1 詩（故事詩）……1 小説（小説，長篇小説）……5 其他（小朋友俱樂部）……3

• 第九期～第十三期（1922年6月、計五号）

歌曲……5 滑稽歌……1 兒歌……2 圖（文藝圖）……2 畫（故事畫）……4 故事（短篇故事，長篇故事，博物故事）……7  
 笑話……5 謎語（謎語，字謎）……5 劇本（劇本，小劇本）……4  
 遊戲（科學遊戲，漢字的遊戲）……2 詩（故事詩）……2 小説（長篇小説）……5 其他（小朋友的創作，小朋友的疑問，小朋友的回答）……7

• 第十四期～第十七期（1922年7月、計四号）

歌曲……4 歌（故事歌，對歌）……3 兒歌……2 圖（文藝圖）……2 畫（長篇故事畫，滑稽畫）……7  
 童話……3 故事（短篇故事，長篇故事，故事）……15 笑話……3 謎語……4  
 劇本……2 遊戲（科學遊戲，遊戲，小工藝）……5 詩（故事詩，詩）……4 小説（短篇小説，長篇小説，小説）……7  
 其他（小朋友的創作，小玩具）……5

• 第十八期～第二十二期（1922年8月、計五号）

歌曲（歌曲，遊戲歌曲）……4 歌（故事歌，雅樂）……2 兒歌……5 圖（文藝圖）……3  
 畫（長篇故事畫，滑稽畫，故事畫，冒險故事畫）……10 童話（童話，短篇童話）……9  
 故事（短篇故事，長篇故事，故事）……16 笑話……7 謎語……5 劇本（小劇本）……1  
 遊戲（科學遊戲，滑稽遊戲，小遊戲，小工藝）……7 小説（短篇小説，長篇小説）……4

其の他（小朋友的創作）…… 8

• 第二十三期～第二十六期（1922年9月，計四号）

歌曲…… 2 歌（故事歌）…… 2 兒歌…… 3 畫（長篇故事畫，滑稽畫，故事畫，小朋友的祝畫）…… 9 童話（童話，短篇童話）…… 3 寓言…… 1 故事（短篇故事，長篇故事，故事）…… 14 笑話…… 3 謎語…… 4 遊戲（算術遊戲，小遊戲，小工藝）…… 5 小説（短篇小説，滑稽小説）…… 3 其の他（小朋友的創作，短文）…… 15

• 第二十七期～第三十期（1922年10月，計四号）

歌曲…… 2 歌（慶祝歌，讚美歌，短歌）…… 3 兒歌…… 5 圖（文藝圖，兩色圖，花鳥圖）…… 7 畫（滑稽畫，故事畫，懸賞彩色畫）…… 6 童話…… 4 寓言…… 3 神話…… 1 故事（短篇故事，長篇故事，滑稽故事，博物故事，問答故事，故事）…… 11 笑話…… 8 謎語（謎語，字謎）…… 6 劇本…… 1 拗口令…… 1 遊戲（文字遊戲，小遊戲，工藝，小工藝）…… 5 小説（短篇小説，長篇小説）…… 7 其の他（小朋友的創作，歷史，常識，表情舞蹈，滑稽問答，滑稽問題）…… 8

• 第三十一期～第三十五期（1922年11月，計五号）

歌曲…… 2 歌（故事歌，山歌）…… 3 兒歌（目次は歌兒となっているが，兒歌の誤り）…… 14 圖（文藝圖，花鳥圖）…… 4 畫（滑稽畫，滑稽故事畫，懸賞故事畫）…… 5 童話…… 5 寓言…… 2 神話…… 1 故事（短篇故事，長篇故事，滑稽故事，衛生故事，修身故事，故事）…… 27 笑話…… 7 謎語…… 5 劇本…… 2 詩（故事詩，新詩，詩）…… 12 拗口令…… 1 遊戲（科學遊戲，文字遊戲，小遊戲，小小遊戲，工藝，小工藝，小戲法，小科學）…… 10 小説（短篇小説，長篇小説）…… 7 其の他（短文，趣文，小朋友的疑問，小朋友的回答）…… 4

• 第三十六期～第三十九期（1922年12月，計四号）

歌曲…… 1 歌（故事歌，趣歌）…… 3 兒歌…… 3 圖（文藝圖）…… 2 畫（故事畫）…… 3 童話…… 5 寓言…… 3 遊記…… 1 故事（短篇故事，滑稽故事，博物故事，問題故事）…… 20 笑話…… 4 謎語…… 4 劇本…… 1 詩（故事詩，詩）…… 8 拗口令…… 2 遊戲（漢字遊戲，小遊戲，小工藝）…… 6 小説（短篇小説，長篇小説，滑稽小説）…… 9 其の他（短文，常識，滑稽問答，明月懸賞揭曉，啟事）…… 5

• 第四十期～第四十三期（1923年1月，計四号）

歌曲…… 1 歌（故事歌）…… 3 兒歌…… 8 圖（文藝圖）…… 4 畫（滑稽畫，故事畫）…… 5 童話…… 6 寓言…… 4 故事（短篇故事，長篇故事，滑稽故事，博物故事，封面故事）…… 24 笑話…… 4 謎語（謎語，字謎）…… 4 劇本…… 1 詩（故事詩，新詩，趣詩，

詩) ……10 遊戯(漢字的遊戯, 新年遊戯, 物理遊戯, 算術遊戯) ……4 小説(短篇小説) ……5 其の他(小朋友的消息, 懸賞故事畫揭曉, 常識談話, 小小茶食店, 郵政信筒) ……9

• 第四十四期～第四十七期(1923年2月, 計四号)

歌(故事歌) ……1 兒歌……6 圖(文藝圖) ……3 畫(故事畫) ……4 童話……6 寓言……3 故事(短篇故事, 長篇故事, 滑稽故事, 歴史故事, 封面故事, 圖畫故事, 地理故事) ……27 笑話……4 謎語……4 劇本……1 詩(故事詩, 新詩, 趣詩, 詩歌, 詩) ……13 遊戯(科學遊戯, 小遊戯) ……3 小説(短篇小説, 長篇小説) ……4 其の他(隨感, 小朋友的消息, 小小茶食店, 郵政信筒) ……8

• 第四十八期～第五十二期(1923年3月, 計五号)

歌(故事歌) ……4 兒歌……13 圖(文藝圖) ……4 畫(故事畫, 滑稽畫) ……5 童話……4 寓言……5 故事(短篇故事, 長篇故事, 滑稽故事, 歴史故事, 封面故事, 圖畫故事, 地理故事, 修身故事) ……30 笑話……8 謎語……5 劇本……2 詩(故事詩, 詩) ……13 遊戯(小科學, 小遊戯) ……3 小説(短篇小説, 長篇小説) ……7 其の他(常識談話, 小小茶食店, 小朋友的消息, 常識, 小尺牘, 郵政信筒, 好消息) ……8

• 総計

歌曲……29 歌……27 兒歌……66 圖……33 畫……66 童話……45 寓言……24 神話及び遊記……3 故事……202 笑話……59 謎語……54 劇本……22 詩……84 遊戯……52 小説……67 其の他……79

上記を見ると, 号を重ねるごとにジャンルの数が増え, 細分化されていったことがわかる。これは『児童世界』とも同様である。中でも注目すべきは故事のジャンルである。故事とは当初は他ジャンルと同じか, 少し多い程度の数しかなかったが, 第三十期(1922年10月26日)を超えたあたりで一気に数が増加している。内容も豊富で, 他ジャンルの追随を許さない存在となっている。兒歌が多いことも興味深い。兒歌とはどういったものかという点, 例えば1923年に出版された『児童文学概論』を見てみると, 次のように説明している。

「民間流傳兒童口唱の歌辭要好聽的, 易唱的是本地方流傳的。」<sup>23)</sup>

(民間に広まった兒童が口ずさむ歌で, 耳に心地よく, 歌いやすく, 各地で伝わっているものである。)

ここでは兒歌と童謡は区別されており, 童謡は調子があって韻を踏み, 口語的で, 各地で流行しているものという説明がなされている<sup>24)</sup>。『小朋友』に掲載された兒歌を見てみると, 長さもまちまちで, 内

23) 魏壽鏞, 周侯于編『児童文学概論』(商務印書館, 1923年) 47頁

24) 同23, 48頁

容も統一性はないが、一文自体が短めのものが多い。第二期には「漁人得利（漁夫の利）」といったことわざを元にしたものもある。

逆に数が減少していったジャンルは歌である。歌曲は毎号必ず1つ掲載されていたのが第二十三期に入ると不定期になり、第四十四期（1923年2月1日）にはなくなっている。劇本も同様で、第十四期以降は不定期となっている。編者を務めた黎錦暉は劇作家、音楽家であったため、歌や劇本が多いかと思われた。しかし、実際はその逆で、これは彼が自分の分野のみならず、子どもに様々な分野を提供しようという姿勢を持っていたのではないかと考えられる。

『小朋友』では『児童世界』よりも注音字母の多用が目立つ。この宣言にも漢字の上に注音字母で読み方が表記されている。成實は当時の「小学校国語課程綱要」に国語科の読本の到達基準として『児童世界』と『小朋友』が挙げられていることを述べ、二誌が当時の子どもの読解能力を知る上での一つのバロメーターとなっていた、と指摘している<sup>25)</sup>。当時の子どもの読解能力には漢字だけでなく、注音字母の理解及び使用する能力も含まれていた。そのため、『小朋友』では「小朋友的宣言」のように本文中に注音字母で読み方がふられていたり、見開きで片方に漢字、もう片方に注音字母で対照させたり、作者の名前を注音字母で記したり、毎号最後に掲載される懸賞の問題が注音字母で書かれ、どういう意味かを問う問題を掲載したりと漢字だけでなく、注音字母の能力に対しても力を入れていたようである。また、このことから『小朋友』は『児童世界』よりやや対象年齢を低めに想定していたのではないかと考えられる。

読者投稿も豊富で、題字のように毎号何かしら子どもの作品が掲載されている。第五期頃から読者投稿のジャンルを設け、本誌の作品の合間に掲載されていた。しかし、号を重ねるごとにその数が増加したためか、特別にジャンルを設けることをやめている。また、第十四期に告知がなされ、第十七期には頁の最後に読者の子どもたちの写真が何枚か掲載されるようになる。そのほとんどが十歳前後、あるいは十代前半の男子の写真で、女子の写真が登場するのはかなりの後の号であり、女子の読者もいたことがわかる。

新村が指摘した通り、『児童世界』が西歐的で多少アカデミックであるのに対し、『小朋友』はより通俗的な印象を受ける。逆に言えばそれは、より中国の子どもたちに密接した誌面作りを心がけていた、と言えないだろうか。号を重ねると、ややその傾向は薄れるが、コミカルな挿絵に短めの文章、注音字母の多用など、子どもの目線に立った形態をとっていた、と考えられる。

### 三 海外の児童文学との関わり

『児童世界』では、イソップ寓話、グリム童話に始まりオスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900年）、アンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805-1875年）の童話、イギリスやインド、ロシア、日本の民話や昔話など、掲載された海外の児童文学作品は非常に多岐に渡っている。『小朋友』も同様

「有腔有韻，便於口語的，也要本地方流行的。」

25) 同5, 134頁



に、掲載された作品の中には海外の児童文学作品も見受けられる。以下、出典が明記された海外の児童文学作品を挙げる。なお、スペルミス等あるかと思われるが、ここでは括弧内に掲載された通りに表記する。原典に関してはきっこう括弧内に表記する。原典不明のものは採用されたという本の題名の訳を括弧内に記す。内容が確認できたものもあるが、そうでないものに関しては推測の域を出ず、未確認と記載しておく。題名の日本語訳は確認済の場合は日本語版のものに依拠し、未確認及び原典不明のものは筆者の訳である。

- 長篇小説「荒唐世界」（根據 The Peter Pan Picture Book 編成的）  
〔ジェームス・マシュー・バリー（James Matthew Barrie, 1860-1937年）「Peter and Wendy（ピーター・パンとウェンディ）」, 1911年, 未確認〕：第二十七期-第三十九期（1922年12月28日）
- 故事詩「争論的結果」（原明 The result of the Euarrel. 見 Joy Book）  
〔「The result of the Quarrel.（口論の結果）」か, 原典不明〕：第二十九期（1922年10月19日）
- 童話「安樂の小神仙」（採用 Wilielm Curtman : Geschichten fuer Kindnr）  
〔ヴィルヘルム・カートマン（Wilhelm Curtman, 生没年不明）「Geschichten für Kinder（子供のための物語）」, 1892年か, 未確認〕：第二十九期
- 短篇故事「幾乎捉住」（採用 Puppy-Dog Tales 上的材料）  
〔（子犬のお話）, 原典不明〕：第二十九期
- 短篇小説「我喜欢你」（採用 Das bunte Buch）  
〔「Das Bunte Buch（カラフルな本）」, 原典不明〕：第二十九期
- 短篇小説「不愛妹妹的哥哥」（採用 wer lesen knna, Freude dran !）  
〔H.ベルトホルト編（H. Berthold, 生没年不明）「Wer lesen kann hat Freude dran！（読む者はだれもが楽しむ）」か, 未確認〕：第二十九期
- 故事詩「小鷓鴣病了」（採用 Little jenny Wren 上的材料）  
〔「Little jenny Wren（小さな雌のミソサザイ）」, 原典不明〕：第三十期
- 短歌「羅平松」（採用 Betty Blue 上的材料）, 原典不明：第三十期
- 童話「蚱蜢旅行」（譯自 wer lesen kann, hat Freude dran）  
〔H.ベルトホルト編「Wer lesen kann hat Freude dran！（読む者はだれもが楽しむ）」か, 未確認〕：第三十期
- 小工藝「做紙盒不用漿糊」（譯自 Toechterchens Zeitvertreib）  
〔ヴァルター・ツイーグラウ（Walter Ziegler, 生没年不明）「Töchterchens Zeitvertreib（かわいい少女のひまつぶし）」1922年か, 未確認〕：第三十期
- 故事「羅佛兒」（選譯 Puppy Dog Tales）  
〔（子犬のお話）, 原典不明〕：第三十一期（1922年11月2日）
- 短篇故事「不應當時他們看見」（採用 Das bunte Buch 上的材料）  
〔「Das Bunte Buch（カラフルな本）」, 原典不明〕：第三十二期（1922年11月9日）
- 短篇小説「星錢」（選用 wer lesen kann, hat Freude dran 上的材料）  
〔H.ベルトホルト編「Wer lesen kann hat Freude dran！（読む者はだれもが楽しむ）」か, 未

確認]：第三十二期

- 故事「多情の田兒」(採用Puppy-Dog Tales上的材料)  
[(子犬のお話), 原典不明]：第三十二期
- 修身故事「練習兩天, 連中三次」(根據 Richard Newton 的 The boy who tried. 編成)  
[リチャード・ニュートン「The boy who tried (挑戦した少年)」, 原典不明]：第三十四期 (1922年11月23日)
- 童話「撒沙人」(Adolf Schrouder 原著), 原典不明：第三十五期 (1922年11月30日)
- 詩「一滴露水」(原名 The Dewdrop)  
[(露のしずく), 原典不明]：第三十五期
- 滑稽故事「兔子放槍」(採用 Der Struwwelpeter 上的材料)  
[ハインリッヒ・ホフマン (Heinrich Hoffmann, 1809-1894年)「Der Struwwelpeter : Die Geschichte von dem wilden Jäger (もじゃもじゃペーター：らんぼうな狩人のお話)」, 1845年, 確認済]：第三十五期
- 短篇故事「嘩喇, 到美國去呀!」(譯自 Das bunte Buch)  
[「Das Bunte Buch (カラフルな本)」, 原典不明]：第三十六期 (1922年12月7日)
- 短故事「偷信的是誰?」(原名 The lost Letters, 採用 The Royal Croun Reader 上材料)  
[T.ネルソン (T. Nelson, 生没年不明)「The royal crown readers (王家の読者たち)」The royal school series, 1919年, 未確認]：第三十六期
- 童話「妖怪的褲子破了」(採用 The story of the pine stump)  
[(松の切り株のお話), 原典不明]：第三十八期 (1922年12月21日)
- 故事歌「池邊的野花」(節用 The story of the flowers)  
[(花のお話), 原典不明]：第三十八期
- 短篇故事「路上的大石」(原名 The stone in the road)  
[(路上の石), 原典不明]：第三十八期
- 短篇小説「捎驢博士」(譯自 Nelson' s Nursery Tales)  
[(ネルソンの子守唄), 原典不明]：第三十八期
- 故事詩「無益的吵嘴」(節譯 The two little kitteus)  
[「The two little kittens (二匹の小さな子猫)」, 原典不明]：第三十八期
- 故事詩「烏鴉的會議」(原名 meeting of the Crows.)  
[(カラスたちの会議), 原典不明]：第三十九期
- 短篇故事「到那裏去了?」(採用 Der Struwwelpeter 上的材料)  
[ハインリッヒ・ホフマン「Der Struwwelpeter : Die Geschichte vom fliegenden Robert (もじゃもじゃペーター：空を飛んだローベルトのお話)」, 1845年, 確認済]：第四十一期 (1923年1月11日)
- 寓言「花和魚」(原明 The story of the flowers)  
[(花のお話), 原典不明]：第四十一期

• 長篇小説「白狄旅行記」（節取 Bunt book 的材料）：第四十七期-第四十九期（1923年3月8日）  
また、中には出典が明記されていないものの、内容から海外の児童文学作品であると判断できるものもある。

• 長篇小説「該死的狼」

〔グリム童話「Der Wolf und die sieben jungen Geißlein」（狼と七匹の子ヤギ）、確認済〕：第十六期-第十八期

以上、合計三十作品である。題名だけでは原典が判断できないものも多く、筆者の力不足から多くを特定することができない。また、これ以外の作品も詳しく見ていけばこれ以外にも海外の作品はまだ存在すると思われる。「不愛妹妹的哥哥」（第二十九期）、「蚱蜢旅行」（第三十期）、「星錢」（第三十二期）だが、参考文献の綴りが若干異なるものの、おそらく同じ書物から採用していると思われる。

しかし一年間で三十作品というと、毎誌のように何か海外の児童文学作品が掲載されていた『児童世界』に比べて少ない印象を受ける。また、参考文献がドイツ語か英語であったことと日本の昔話などの翻訳翻案作品は見当たらず、西洋の作品を中心に取り入れていたのではないかと推測され、『児童世界』と比べてみても海外の作品への意識は低い。

上記三十作品の中で、第三十五期の「兔子放槍」と第四十一期の「到那裏去了?」は『もじゃもじゃペーター』をもとにしたものである、と明記されている。また『もじゃもじゃペーター』の話は『児童世界』にもいくつか掲載されている。第三卷第五期（1922年8月5日）の「方兒與狗」と第三卷第六期（1922年8月12日）の「方兒落水記」は「ぼんやりハンスのお話（Die Geschichte von Hans Guck-in-die-Luft）」、第三卷第七期（1922年8月19日）の「羅辰乗風記」は「空を飛んだローベルトのお話（Die Geschichte vom fliegenden Robert）」、第三卷第八期（1922年8月26日）の「費兒之厄運」は「ジタバタ・フィリップのお話（Die Geschichte vom Zappel-Philipp）」を描き直したものと浅野は指摘している<sup>26)</sup>。いずれもあまり残酷でない作品を選んで掲載しており、編集側の子どもに対する配慮がうかがえる。なお、日本で『もじゃもじゃペーター』は1936年6月に伊藤庸二の訳で曙光出版部から初めて翻訳出版され、このときの題は『ぼうぼうあたま』である<sup>27)</sup>。ここでは二誌ともに掲載されていた「空を飛んだローベルトのお話」について少し検証していく。

まず原作の「空を飛んだローベルトのお話」<sup>28)</sup>だが、大雨の中、傘をさして野原へと出かけたローベルトだが、あまりに風が強いので吹き飛ばされてどこへ行ったかわからなくなってしまう、というお話である。原作では一頁を3コマに分けてそれぞれの挿絵に対照した文章がつけられている。筆者にドイツ語の知識はないので、訳文を頼りとするが、一文一文簡潔で、わかりやすい文章となっている（図5）。次に『児童世界』であるが、残念ながら現物が手元にないため、どのような形態で掲載されたのか確認出来ないが、「羅辰乗風記（羅辰、風に乗る）」と題され、作者は鄭振鐸であるという。『鄭振鐸和児童

26) 同7, 237-238頁

27) 子どもの本・翻訳の歩み研究会編『図説子どもの本・翻訳の歩み事典』（柏書房株式会社、2002年）、84頁

28) 本稿では訳文、図ともに全て以下を参考にした。

Heinrich Hoffmann *Der Struwelpeter, oder, Lustige Geschichten und drollige Bilder* (Holp Shuppan, 1982年)  
『復刻 世界の絵本館一ベルリン・コレクション』（ほるぷ出版、1982年）、119-124頁

X. Die Geschichte vom fliegenden Robert.



図5 「空を飛んだローベルトのお話」

Wenn der Regen niederbraust,  
Wenn der Sturm das Feld durchsauft,  
Bleiben Mädchen oder Buben  
Hübsch daheim in ihren Stuben. —  
Robert aber dachte: Nein!  
Das muß draußen herrlich sein! —  
Und im Felde patschet er  
Mit dem Regenschirm umher.



図6 「到那裏去了?」

文学』の「《児童世界》篇名目録」によると、「彩色図画故事」というジャンル名がつけられていることから、カラーのイラスト付きで掲載されたと思われる<sup>29)</sup>。本文は非常に短く、文が三つ並んでいるだけである。恐らく一枚の絵に一文、という形であったのだろう。もし絵が三つとするならば、原作と同じ形態であるが、そこに付随する文章量は大きく異なる。

「一、罗辰不怕风雨，带了洋伞出门去。

二、洋伞连罗辰一齐乘风飞去。」<sup>30)</sup>

(一、羅辰は雨風を恐れず、傘を持って出て行った。

二、傘は羅辰も連れて風に乗って飛んでいった。)

特に異なるのが最後の一文である。原作の「空を飛んだローベルトのお話」では次の通りである。

「ローベルトも かさも どこまでも

雲を つきぬけて のぼってく。

ぼうしは 風に とばされて

とうとう 天までとんでった。

風は どこまで はこぶのか。

それは だれにも わからない。」<sup>31)</sup>

一方、「羅辰乗風記」の最後の一文は次の通りである。

「三、罗辰此去，谁也不知他到那里，恐怕是上天同那白云儿游戏。」<sup>32)</sup>

(羅辰は行ってしまった。彼がどこに行ってしまったのか、それは誰も知らない。恐らく空であの白い雲と遊んでいるのだろう。)

単にどこへ行ってしまったのかわからない、という寂しい終わり方を払拭するためか、「羅辰乗風記」

29) 同9, 532頁

30) 同9, 418頁

31) 『復刻 世界の絵本館—ベルリン・コレクション—』(ほるぷ出版, 1982年), 124頁

32) 同9, 418頁



では雲と遊んでいるのだろうかという内容が追加されている。これは編集者であった鄭振鐸の子どもたちへの配慮がうかがえる。では、『小朋友』ではどうだったのだろうか。題名は「到那裏去了?（どこまで行ったの。）」で作者は呉汗云（生没年不明）とあり、見開きで掲載されている。挿絵は3枚で、全て原作の「空を飛んだローベルトのお話」を参考にしたと思われる絵になっている（図6）。文章はというと、原作のように挿絵に対応した文章形態ではなく、一つの物語として文が連続した形態となっている。内容を見てみると、おおよその筋は同じで、「羅辰乗風記」では追加されていた結末部分も特に修正されず、「どこに吹き飛ばされたのか、一人として知る者はいなかった」<sup>33)</sup>となっている。ただ、冒頭に原作にはない追加された描写がある。

「有一天，大風大雨，寶哥兒和寧哥兒……都守在家裏，不敢出來；只有魯伯最頑皮，他偏不聽他媽媽的話，他想“這時候，外邊一定要比平常好看些。”他便偷偷的撐着一把傘走到原野去了。」<sup>34)</sup>

（ある日のこと、ひどい風にひどい雨で、寶哥兒と寧哥兒……みんなは家において、あえて出ようとはしなかった。ただ一人、いたずら好きの魯伯は母親の言うことを聞かず、「こんなとき、外はきっといつもと違ってすてきだろうなあ」と思い、こっそり傘を持って平原へと出て行った。）

次に、原作の「空を飛んだローベルトのお話」の冒頭を見してみる。

「ザアザア 雨が どしゃぶりで  
風が 野原で あばれるとき  
女の子も そして 男の子も  
みんな じぶんのへやにいる——  
でも ローベルトは かんがえた！  
外は とっても すてきだぞ！  
そして 野原へ かささして  
でかけて ピシャピシャ あるいてみた。」<sup>35)</sup>

「到那裏去了?」では母親の言うことを聞かずに外へ出て行くという描写が追加されており、原作よりも教訓的側面が強調されている。

『小朋友』でもう一つ取り上げられた『もじゃもじゃペーター』の「らんぼうな狩人のお話」はどうだったのだろうか。こちらは『もじゃもじゃペーター』の中で唯一動物が主人公の作品である。『小朋友』では子どもが主人公の作品だけでなく、動物を主人公にした作品も多いため、『もじゃもじゃペーター』の中からこの作品が取り上げられたことも納得できる。乱暴な狩人がうさぎを狩ろうと野原へやってくるものの、暑くて少しばかり昼寝休憩をする。そこへうさぎがやってきて、狩人の銃を奪い四方八方撃ちまくる。驚いた狩人は「助けてくれ!」と逃げ回り、井戸の中へと逃げ込んだ。うさぎはさらに銃をうち、窓辺でコーヒーを飲んでいた狩人の奥さんのコーヒーカップを真っ二つにし、コーヒーがかかっ

33) 呉汗云

「到那裏去了?」(『児童世界第』四十一期, 1923年) 33頁

「後來到底吹到那裏去了委實沒有一個人知道」

34) 同33, 32頁

35) 同31, 124頁

Die Brille hat das Hässchen jetzt  
 Sich selbst auf seine Nase gesetzt;  
 Und schießen will's aus dem Gewehr.  
 Der Jäger aber fürcht'et sich sehr.  
 Er läuft davon, und springt, und schreit.  
 „Zu Hülf' ihr Leut'! Zu Hülf' ihr Leut'!“



図7A 「らんぼうな狩人のお話」

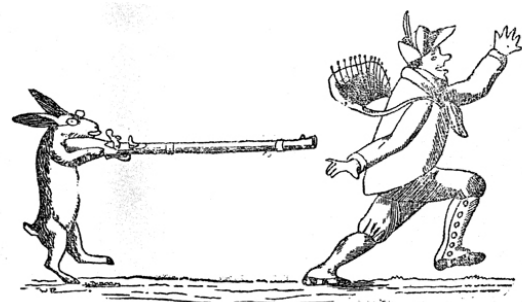


図7B 「兔子放槍」

てやけどをし、誰だやけどをさせるのは、と叫んで終わるというお話である。原作は三頁にわたるものだが、『小朋友』の「兔子放槍（うさぎ、銃を放つ）」では四頁構成となっている。「到那裏去了?」と同様、原作とほとんど同じ挿絵が四つ添えられている（図7A、図7B）。訳者は呉漢云（生没年不明）であり、もしかすると「漢」と「汗」が間違っており、同一人物の可能性もある。ただ、他作品を見ても呉漢云と呉汗云の名前はいくつか見受けられるため、別人の可能性もあるが、現段階では断定できない。話の内容は「到那裏去了?」と同様、原作にほぼ忠実に翻訳されているものの、最後の部分に追加された描写がある。

「原來這井裏的水不甚深，所以獵人在內面還不吃苦。過一會兒，獵人的妻子請了幾個隣人來，才把他從井裏救起。」<sup>36)</sup>

（元々この井戸の水は浅く、おかげで狩人は苦しい思いをしなくてすんだ。しばらくすると、狩人の妻は何人かの隣人に頼んでやっと彼を井戸から助けることができた。）

原作では狩人がどうなったかは描かれておらず、生きているのか死んだのかもわからない。それに対し、「兔子放槍」では狩人はちゃんと生きていて、助けられている。少しでも残虐性を減らし、平和な結末を迎えられるようにといった配慮がうかがえるものである。

以上、比較してみると『児童世界』では独自の紹介方法であったのに対し、『小朋友』ではほぼ原作に忠実に翻訳して掲載されているが、所々子どもへの特別な配慮がうかがえる。訳者の方針もあるだろうが、二誌の翻訳に対する姿勢の一端を垣間見ることができる作品と言えよう。

## おわりに

ここまで、『小朋友』創刊後一年間の特徴を見てきた。その内容は海外の児童文学作品を積極的に取り入れていった『児童世界』と比べて、創刊当初より創作面を重視してきた傾向がある。中でも故事や兒歌に見られる中国特有の作品を数多く取り入れていたことは、より中国独自の作品を子どもたちへ提供したいという編集者側の考えがうかがえる。また、創刊後半年経ってから海外の作品を翻訳翻案した

36) 呉漢云「兔子放槍」（『小朋友』第三十五期，1922年），22頁

ものも見受けられるようになり、決して海外の作品を軽視していたわけではないことがわかる。ただ、その作品も西洋のものが中心であり、当時の中国ではやはり西洋に対する関心が高かったと思われる。実際の翻訳翻案作業に関しては、『小朋友』では原作にほぼ忠実であるが、多少の付け加えが見受けられる。単に翻訳するだけでなく、子どもの視点に立って翻訳作業を行おうという姿勢を持っていたのではないだろうか。多様な文化が渦巻く上海の地で、その風潮に流されず、中国の独自性を追求していたその姿勢は評価に値する。しかし、通俗的で多少味気ないものになってしまった点は否めない。

『児童世界』、『小朋友』共に第一資料の入手が困難であるが、本稿を足がかりとし、今後は可能な限り、これらの雑誌の変遷を追うことにより、中国における児童文学の傾向の変遷及びその形成過程を明らかにしていきたい。

